

社会の進化はわたしたちに何をもたらすのか

社会ダーウィニズムについて考える

先日職場で、昨今の厳しい経済情勢を反映してか、上司から「今の時代は、商売も（人道を排して）鬼にならなければならない。」と檄を飛ばされた。

まあ確かに、顧客優先の経営が原因で行き詰まってしまう企業も多く、その多くがリストラや雇用削減などに追い込まれている場合も少なくない。ついこの間銀行間の事業統合が合意された「第一勧銀・富士・興銀Ⅱみずほ銀行」にしても、資産百四十兆円という「世界最大」という資本金の影で、六千人のリストラが予定されているというのには、ただただ驚くばかりだ。

新聞の解説には「内外で激化する競争に生き残るためには、個別銀行の改革努力では限界があり、問題解決には再編が避けられない現状を改めて突きつけた。」（注1）とあり、改めて不況の厳しさを思い知らされる。

また、今春の入社式で昭和電工の社長、大橋光夫氏は「優勝劣敗、弱肉強食の時代に入り、企業が選別されるようになった以上、企業内の個人も選別されるのは当然だ」として、日本型経営の見直し（能力給の導入や、終身雇用の廃止など）を提言している。（注2）

不況を生き残るという意味での「優勝劣敗・弱肉強食」の発想は、十九世紀ホッブスが「万人の万人に対する闘争」と呼ぶところの市民社会の競争原理であるともいえるわけだが、そもそもこの「弱肉強食・適者生存」という言葉は生物学的用語で、生物の進化を指す概念である。

そして、このようなアナロジーが成立してしまう背景には、人間がよりよく生きるという価値が後景化してしまい、「生物の進化と同じ仕組みが人間社会にも作用していて、社会が進歩するためにはそれを妨げてはならない」という考え方がある。この発想は社会ダーウィニズムと呼ばれ、歴史的にはナチズムの優生学思想や、「スターリン主義」と言おうかマルクス主義哲学にいう唯物論にも援用されてもきた。

だからと言って、社会ダーウィニズム≡ネオナチズム（≡マルクス主義）という短絡した論断はいささか早計と言えるだろう。問題なのはこのような発想がどのようにして成立していったのかということであり、ナチズムやマルクス主義は潰れても、社会ダーウィニズムが再び三度、形を変えて登場しえる土壤がどこにあるのかが問題になる。

そこで本拙文では、社会ダーウィニズムの祖と呼ばれ、後の思想家に多大な影響を与えたとされるスペンサーの思想と対質することを通じて、人間と社会の有機的な関係が果たして存在しえるのかについて考えてみたい。ついでながら私自身かつてはマルクスを座標軸にして思想形成をしてきた人間である。『階級闘争を通じて共產主義社会を実現する』という、当時の私から見れば真っ当な『ドグマ』を実践してきた主体であり、そういった意味で「真理」に縛られていたということは言える。

今でこそ「相対主義」だとか「定常状態」ということを問題にし始めているが、まだまだ「真理」から天下の発想を拭いきれていないので、そういった反省も含めて、自分に引き付けて考えていきたいと思う。

注1―『朝日新聞』八月二〇日付け記事より
注2―同誌六月二六日夕刊より

混沌から秩序へ

後の世代の私たちが、歴史の当該個所に彼らを当てはめるのとは違い、スペンサー自身は、自らを社会ダーウィニズム（イスト）であると規定した事はない。ただ彼の言動が後の生物学・社会学のパラダイムを形成していったという意味合いにおいて、社会ダーウィニズムの祖と称されているということである。

因みにチャールズ・ダーウィンがその主著『種の起源』を著したのが一八五九年であり、スペンサーが三十九才の時である。彼の「総合哲学」の主張がそれに先立って論壇を賑わしていたということは、ダーウィンを始め当時の研究者がどれだけスペンサーの思想に影響されていたかをみれば明らかである。

さて、それではそのスペンサーの主張であるが、思想史で言えばフランスのコントと共に実証社会学の唱道者であり、社会や国家を生物有機体とのアナロジーにおいて見る社会観（“社会有機体説”）であると言える。

それまでも社会を有機体として見る発想は、例えば古代のギリシア哲学などにも見られるのだが、十九世紀の生物学の発展によって生物の有機体としての構成が明らかになるにつれて、つまり市民社会内部の構成要

素がそれに対応させられるに及んで、社会を人体に見立てた考え方がスペンサーによって主張されたことになる。もとより彼の言う実証主義の考え方は、本質還元主義的な発想を退け、実証可能な諸現象の連関によって世界を解釈していく方法論である。スペンサーが文字通り社会の有機体的な現象に着目して世界を解釈しえたとするなら、そこには彼の生きた時代のダイナミズムが作用しているはずである。

それを検証する意味でも、同時代に同じく実証主義的な世界解釈を成した、コントの思想と対比させて見ることにする。イギリスとフランスに生を受けた二大思想化の社会観の違いを通じて、当時の時代背景や、社会思想史におけるパラダイムの素描に少しでも役立てばと思う。

コントは一七九八年、フランス革命勃発から九年目という激動の時代に生まれた。彼の両親は立派なカトリック信者になってもらおうと、彼に三人の聖人の名を授けたという (Isidore Auguste Marie Francis — Xavier Comte)。

しかしそんな両親の願いをよそに、フランス革命を経て、ナポレオン支配下での社会の動揺は凄まじく、結局彼はカトリックの信仰を捨てて「本来在るべき社会」を模索し始めるのである。

青年期のコントは、有名な社会主義者であるサン・シモンの秘書であった。コントは彼の影響下で主体形成を成したが、一八二二年、『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』を執筆して、師であるサン・シモンと絶縁してしまう。

「社会主義者」サン・シモンの許容範囲を乗り越えてしまった、コントの実証学の主張を一言で言えば「秩序の社会学」ということになるだろうか。

彼の歴史哲学は、未開なものから文明を介して完成の域に至っていく論理構成になっていて、「フェティシズムから一神教へ」といった、未知から既知への暫時的進歩と促えられる。

その社会が未熟であればあるほど、その構成原理を絶対的存在たる神に委ねてしまうことになるのだと、コントは説く。そしてそうした神学的段階の崩壊過程である、形而上学的段階を経て、「人間の知性は、このように長く続いた必然的な予備段階によって徐々に解放され、ついに合理的実証性という最終段階に導かれる」(注1)というのだ。

つまり歴史の総合としての不変な自然法則が、その対象たる人間理性により“観察”される事を通じ、成立するという訳である。その場合、真理(神)を求める“想像”は実証的合理性の前に従属することになる。

さらにコントは「社会的再組織という大事業のためには、人間精神の本性によってはっきりと規定されたコースを採用することが緊急で不可避な必要事である」(注2)とも述べ、この事業の重要かつ緊急性を強調する。

同時代のドイツで、絶対精神の自己顕現を説くヘーゲルの『精神現象学』が記されたことを鑑みれば(コントが九歳のとき)、このようなコントの歴史認識も、ヘーゲルと同様に、当時の混沌せる祖国フランスを救い、世界に秩序をもたらそうという強烈なバトスが示されていたと言える。

しかし、革命の英雄、ナポレオンを絶対精神の顕現と規定したヘーゲルが、中世形而上学の総合であったのに比して、その否定であるコント実証的社会学の関心は、フランス革命よりもむしろイギリスの産業革命にあったと、自らコントの信奉者であると自負する、哲学者の清水幾太郎氏は述べている。(注3)

古い秩序の崩壊と、新しい時代の展望を産業革命(＝科学)に見た青年コントの胸中には、いったいどんな理想社会が去来していたのであろうか。

そんな時代背景の中、フランス革命下の混乱の中で、コントが希望を見いだした対岸のイギリスでは、産業革命に洗礼を受けつつ育ったスペンサーが、コントとは立場を異にする実証社会学を展開していくのである。

注1 — 中央公論社、世界の名著『リント・スペンサー』 P155

注2 — 同書 P69

注3 — 同書 P19

秩序から進化へ

スペンサー (Herbert Spencer) は、一八二〇年イギリスのダービーに生まれた。彼の父は唯一の真理である「科学」を信奉していて、何処に行っても “What is cause?” (何が原因か) が口癖であったという。その上、彼の叔父は極端な自由放任主義者であり、そんな親族のエキセントリックともいえる環境に触発されて、彼の進化論は生まれたのである。

さて、当時彼の理論がどのくらいの影響力を持っていたのかというと、殊に日本における受容のされ方には、一種異様な広がりを持っていた。

『世界の名著』の解説者、清水幾太郎氏が、実体験を交えて語っているように、日本における自由民権運動の中心的なイデオログである板垣退助などは、スペンサーの『社会平等論』を「民権の教科書」と呼んで愛読していたそうであるし、「二十年間、彼の著作の一つ一つが着実に翻訳、刊行されて行ったというのは、それ

自身、大きな事件であった」（注1）というのは、清水氏の誇張でも何でもなく、日本の知的生産者にとって、当時最も求められていた理論であった現実を雄弁に物語っている。

その証拠として、自由民権運動のインテリ以上に、当時の明治政府の要人もしばしばスペンサーのもとを訪れ、諸制度の改造や、何と「大日本帝国憲法」の起草についての助言を受けていたというのである。まさにスペンサーの学説は、日本の自由民権のバイブルであったと規定しても差し支えないであろう。

ただ、日本における「青天の霹靂」のような許容のされ方と、当地イギリスでの受け止められ方には若干の相違がある。彼の極端な自由放任と、熱烈な科学主義信仰であるが故なのだが、これは前述したように父と祖父の影響によるところが大きい。

さて、スペンサーはJ・S・ミル同様、父親の経営する学校のワンマン生徒であったこと以外に、パブリックスクールにも、大学に通うことすら許されなかった。社会とのバランスを保てないスペンサー青年は、産業革命に代表される科学万能の神話を父親から学び、自らも進んでそれに貢献すべく、ロンドン・バーミンガム鉄道の技師になった。

まさに産業革命の申し子とも言えるスペンサーが、約十一年間の就業の後に突如ジャーナリストへ転身した経緯については不明であるが、その後イギリスの経済雑誌『エコノミスト』の編集部で彼は、「綜合哲学」(Synthetic Philosophy)の構想を練り上げ、次々と書物を著して行くのである。一九五七年、スペンサー三十七歳の決断であった。

ここで所謂「スペンサーの思想的転機」について考えてみたいのだが、絶対的な科学信奉への憧憬を深めていた彼が、その最先端での職を投げ打ってまで、思索の道を選んだのはなぜかという問題である。

何冊かスペンサーの解説書などを読んでみても、あまり明快な説明を見受けなかったので、一旦は諦めて、「不

明」という表現を使つてはみたものの、どうも引っかかるので、私自身「もう使わなくなった」古い昔の文献などを漁っていると、偶然にも面白い記述に出会ったのである。

「資本主義社会では、何年かごとに主要な生産部門が過剰生産に落ちいり、買い手のない商品が市場にあふれる現象が起ります。」(注2)つまりここでは恐慌の周期性を述べているのであるが、当時のイギリスで産業革命が勃発してから、一八二五年(スペンサーが五歳の時)にはじめて恐慌が起り、以降三六年(十六歳)、四七年(二十七歳)、そして五七年(転機の三十七歳)と周期的に恐慌が起きているのである。

つまり客観的な状況としては、周期的恐慌を目の当たりにしたスペンサーが、産業革命(≡科学主義)の危機を抱いたかどうかは別にして、社会の深刻な雇用情勢に規定され、リストラされてしまったのではないかというのが私の考えである。少し卑俗的過ぎるかも知れないが…。

ともかく、三十七歳の決断、ならぬ出版社へ再就職したスペンサーの「綜合哲学」の中身について見ていきたい。

『進歩について』と題された著作のなかでスペンサーは、「一般に通用している進歩の観念は目的論的である。」と言って、「正しい意味での社会的進歩とは、社会という有機体の構造上の変化」であると規定する。(注3)ではその「構造上の変化」とはなにか。

ここでスペンサーは、種子の胚種を例にとって説明している。つまり、どんな胚種でも初めは「均質」であるものが、細胞分裂を起こし、二つの部分間に相違が現れる。これが「分化」であり、このプロセスの繰り返しによって、成熟した動植物を構成する組織や器官の複雑な結合が生まれるというわけである。これをスペンサーは「同質から異質への変化」(注4)と呼ぶ。さらに、このような変化が、全有機体を貫く根本的な法則であると主張するのだ。

つまり、「有機体」の概念規定という事になるのだが、単細胞から多細胞への構造的変化は、生物学的には既知の事実としてわたしたちも理解しているものの、スペンサーはその生物学的な領域を、社会や政治、貿易や製造といった分野にまで拡張していくのである。

彼は「現存の未開民族に見られるように」(注5)と、わざわざ注釈を付けた後に、(人類にとって)最初の社会形態は、同じような力をもった諸個人の同質的集合体であると規定する。それが初めは狩猟や外的からの防御といった即時的な必要性により、後にはその共同体を維持・運営していくための合理的判断として、何らかの首領が誕生するのだ。

「何らかの」という意味は、未だすべてを統括するような首領ではなく、狩に行く際のリーダーであったり、住居を建築する際の頭領であったりという程度の意味である。

こうして、その共同体の割合早い時期に誕生した、支配―被支配の関係性が「分化」であり、それが繰り返されることを通じ、より複雑な社会関係が営まれることになる。これをスペンサーは「第一の分化」と呼ぶ。

次にその有機的構成の高まった共同体同士での交易が始まるのであるが、初めの段階では各々の共同体内部で製品化された商品の移動であったものが、絹は何々地方、レースは何処何処地方と言う具合に、地域間―共同体間での分業が進み、次第にギルドというような新たな組織形態を形成していくのである。これが「第二の分化」である。

こうした歴史観は、私たちとも馴染みの深いマルクスの歴史観(＝唯物史観)などにも引き継がれている。特に分業と所有を論じたマルクスの次の言葉などは、まさにスペンサーの引き写しではないかと思ってしまうほどだ。

「特定の生産様式あるいは特定の工業段階は、いつでも特定の協同様式、あるいは特定の社会段階と結びつい

ており、この協同様式が、それ自体ひとつの《生産力》であること。人間たちが入手しうる生産力の総体が社会状態を規定すること。」(注6)と要するに社会の動態的把握をしていく際の方法論として、スペンサーの学説は内外で重宝がられたと言えるのである。

ともあれ、このようなスペンサーの進化の概念は、人間や動植物のように社会が外皮としての連続性を保ちえていないにも関わらず、諸関係の有機的な連関をもって、生物の有機的關係に置き換えたものである。

そして、スペンサーの言う社会有機体の「生命」は、細胞たる内部構成員(つまり人間)が死滅しても、新たな細胞の新陳代謝によって無限の生命を維持することが、少なくとも理論上は可能になるのだ。

しかし、人間や外皮を持ちえる生物有機体にあつては、快楽・苦痛原則というか、神経系統の発達によって支配されていて、免疫系の話を持ち出すまでもなく、幸福を求め、苦痛を回避するために各細胞が協力し合うという構造になっている。

片や、社会の有機的構成を実現できたはずの社会有機体の内部では、各々の特殊利害と普遍利害が交錯する複雑な社会規範が出来上がってしまっていて、例えば軍事偏重型の組織であれば、命令―従属という系統は成り立つものの、それだけで共同体内部の全成員のイニシアチブをとることはできない。

つまり、「同質なもの異質への分化」を言うスペンサーは、社会の拡散へと向かっていく傾向を、叔父譲りの自由放任主義的な観点から推奨するものの、その社会の同心円的な発展というものに目配せをしていなかったのではないだろうか。ゆえに「適者生存」というような殺伐とした新陳代謝を堂々と披瀝できたのである。

二十二歳年長のコントが、フランス革命の混沌から秩序を求めて、社会の有機的綜合を目指したのとは対象的に、スペンサーのそれは、イギリス産業革命の成果の上に乗り、社会のしがらみとは無縁な、父親が経営する教室の中で純粹培養された理論であり、(あくまでも憶測としてだが)文字通り「弱肉強食」の恐慌下でリス

トラされてしまった己のルサンチマンから、社会はこうあるべきだと論じているのではないだろうか。
その意味で、社会ダーウィニズムの起源は、スペンサー流の楽観的な自由放任主義と、法則としての科学主義のグロテスクなまでの融合ということが、言えるのではないかと思う。

優生学と現代の課題

スペンサーの学術的な業績ということで、もう一つ忘れてはならないことがある。それはナチズムのユダヤ人排斥運動へと連なっていくような、社会ダーウィニズムの理論的確立ということである。

- 注1 — 中央公論社、世界の名著『コント・スペンサー』 P30
- 注2 — 大月書店 レーニン著『カール・マルクス』 P45
- 注3 — 中央公論社、世界の名著『コント・スペンサー』 P308
- 注4 — 同書 P400
- 注5 — 同書 P406
- 注6 — 合同出版 マルクス著『ドイツ・イデオロギー』 P38

こういった傾向は、セルビア人による民族浄化といった、現存する悲劇の温床ともなっていて、社会的なデジエネレイション（人種退化）と呼ばれる傾向に対して、自然淘汰ならぬ人為的な淘汰を行う発想の在り方を指す。

ただ、こういった傾向は、何もセルビアのミロシエビッチとかヒトラー、スターリンの専売特許というわけではなく、私たちの日常にも浸透してきている考え方であって、決してデフォルメされたイメージに惑わされてはならない。

それは「優生思想」といい、字句通りに解釈すれば「すぐれた生命が望ましい」とか、「命をすぐれたものにしていく」という思想である。ただ、そこに個体差による正負のラベリングがなされ、「優勝劣敗」のレトリックが持ち込まれることで、一つのイデオロギーとしての力を得てしまうということを、ナチズムの重く暗い歴史の教訓として、私たちは考えていかなければならない。

それは主に、生殖によって子孫を再生産していく際の、親のエゴイズムへとつながっていく問題でもある。健康で「五体満足な」子供が欲しいと欲する両親が、羊水診断などの出生前検診を受けるケースをとりあげて、森岡正博氏は次のように指摘する。

「このような出生前検査が広まってくると、やがては、障害児を産まないことが妊婦の心得として強制させられていくかもしれない。妊婦は、障害児を産まないように生活をコントロールする倫理的義務があるのであり、もし障害児だと分かったならば、中絶してもう一度健常児を産むべく努力しなければならないというようなコンセンサスができあがる可能性も否定できない。」（注1）いささか長い引用になったが、生命の質を考えて行く際に、障害児（者）が果たして社会的な不適格者であるのかという問題は、切り離せないのではないだろうか。

生命倫理学の中には、自我の芽生えていない新生児の堕胎には罪は無いという論争がある。私自身としては、

その妊婦や父親の経済的理由、家庭環境の考察抜きに論断する理由もないが、妊娠や堕胎が自由に選択できる、社会の歪ともいうものを非常に虚しいものと感じる。

いずれにせよ、生命の質と「優生思想」の狭間で、社会ダーウィニズムの問題は今後も論争され、深められていくべき問題であることを最後に述べて、本拙文の結語としたい。

なお、時間の制約で今回は深められないが、社会的被抑圧の文化構造を捉え直していく、「カルチュラル・スタディーズ」のムーヴメントが最近にわかに脚光をあびている。簡単に言えば、民族差別やジェンダーなど男女間の構造的差別を生んできている社会を、相対化してしまおうとする試みである。「マルクス主義後の左翼のアジュール（待避所）だ」（注2）などと言われもしているそうであるが、文学や社会学、歴史学などをサバルタン（被抑圧者）の視点で読み返す試みには大いに共感できる。

（1999.12）

注1 — 大明堂 森岡正博ほか編『生命論への視座』P133

注2 — 『朝日新聞』九月四日夕刊より